

OB訪問



今回向かったのは夕張市。財政再建、人口流出という厳しい現実にも前向きな施策を打ち出し全国から注目されるこのまちで、在宅医療に情熱を注ぐ薬剤師・小島さんを訪ねました。地域に飛び込み、地域に溶け込む新しい薬剤師像をご紹介します。

アインホールディングス 地域連携部地域連携課 課長／薬剤師
小島 多加志さん（薬学部薬学科1992年卒業）

■ 震災が変えた薬剤師像

小島さんは本学薬学部卒業後、調剤薬局での店舗勤務、薬剤師研修、本部運営などに携わり、2011年からアイン薬局夕張店で在宅訪問専任薬剤師として活躍しています。この年は小島さんの薬剤師像を大きく変えた年でした。3.11東日本大震災。小島さんは発生10日後から、被災した岩手県のグループ店舗の支援に入り、限られた在庫をやりくりして極限状態にある人々に薬を届けました。この時抱いたのが「いままでは患者さまが来るのを待つだけだった。人や社会の役に立つためには、薬剤師ももっと能動的にならなければ」という強い思いだったといいます。その思いが現在の小島さんの原動力です。

■ 多職種ケアカンファレンス

取材日は、週に1度の多職種ケアカンファレンスの日。夕張市立診療所に医師、歯科医師、看護師、薬剤師、作業療法士、栄養士、社会福祉協議会ケアマネジャーや介護老人保健施設相談員、診療所事務長など医療、介護にかかわるありとあらゆる職種が集まり、在宅医療利用者についての情報共有が図られていました。利用者の現在の状態や意思、ご家族の希望などが細かな点まで共有され、意思統一の下で各職種がどう動くべきかが次々と決まっています。このほか医療・介護



取材日は18名で行われたカンファレンス。歯科診療部長の八田政浩先生（中央・白衣上下の方）は本学歯学部卒業生、予防・在宅をキーワードにした口腔ケアの第一人者です。

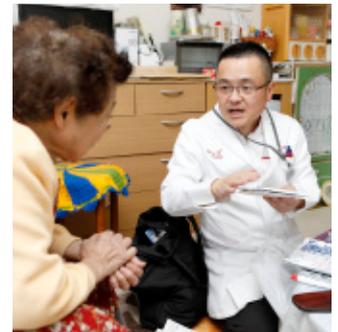


「聴診器をかけた薬剤師」小島さんは、訪問時に血圧、脈拍、酸素飽和度を測定。日本在宅薬学会に所属し、薬剤師対象のバイタルサイン講習の指導者、エヴァンジェリストの認定も受けています。

スタッフに寝具や在宅酸素を扱う業者を加え、患者さん宅で方向性を話し合う在宅担当者会議も必要に応じてもたれるそうです。

■ 患者さんの生活の場へ

カンファレンス後、患者さん宅を訪問する小島さんに同行しました。小島さんは、医師が基本2週間ごとに行う訪問診療後に出す処方箋、情報提供書に基づいて調剤し、通院が困難な患者さんの元へ薬を届けます。訪問先は個人宅のほかグループホームなど施設もあります。しかし、単なる薬のデリバリーではありません。患者さんの理解力、生活パターンに合わせて薬の説明をし、飲み忘れ・飲みすぎ防止方法を具体的にアドバイス、健康食品の相談も受けます。「数居の低い存在でありたい」と患者さんの懐に飛び込んでいく小島さんの中には、患者さんの趣味、遠方に住むご家族、これまでの人生、あらゆる情報が蓄積されているのがわかります。「なんでも気軽に聞けるいい先生よ」「説明がわかりやすくて助かるの」、見学を快く受け入れてくださった患者さんのことばから、小島さんへの信頼が伝わってきます。



残薬管理は壁に掛けるカレンダー型、ボックス型など生活の様子を見てアドバイスします。

■ “夕張モデル”を担う

小島さんは訪問時にバイタルサイン^{*1}をチェックします。「薬が効いているか、副作用はないかの確認、さらに訪問を異常の早期発見につなげるため、薬剤師にもフィジカルアセスメント^{*2}が重要と考えます」（小島さん）。患者さんの状況は必要があれば医師とすぐに共有、時には携帯するタブレット端末で撮影した画像を提供します。

訪問する患者さんの病状は様々です。がん終末期の在宅での緩和医療というケースもあります。これまでに医師らとともに在宅での看取りも経験しました。「薬剤師は守備範囲が広く、チーム医療のキーパーソンとなり得ます」。きっぱりとした小島さんの口調に仕事への誇りがのぞきます。

国が在宅医療を推進するなか、人口が激減し高齢化率が50%を超えた夕張市の取り組みは“夕張モデル”として全国から注目を集めています。訪問薬剤師の可能性を切りひらき続ける小島さんの毎日、薬剤師の一つのモデル確立へとつながりそうです。

*1 体温・血圧・脈拍などの生命徴候。

*2 問診、視診、聴診など患者の身体に触れながら症状の把握や異常の早期発見を行うこと。